

## 神奈川県立歴史博物館との懇談会について

—無理のない「継続」を求めて—

鎌倉学園高校 風間 洋

2021年3月3日(水)、日本史推進委員会(以下、本会)の例会の一環として、神奈川県立歴史博物館(以下、県博)学芸員との意見交換会が行われた。本来昨年3月の企画であったが、コロナ禍の影響で中止となっていた。今回も首都圏の緊急事態宣言のため、県博は休館中で実施が危ぶまれたが、丹治雄一氏はじめ県博側のご厚意で特別に開催することが出来た。県博の皆様にご挨拶申し上げたい。

はじめに「かながわ遺跡展『相模川遺跡紀行』」を県埋蔵文化財センターの丸吉繁一氏のご案内で観覧した【写真①】。本展は相模川流域の発掘調査の成果を豊富な遺物で紹介するもので、原始～近現代までの県内の出土遺物が所狭しに並ぶ展示室は、それだけで壮観であった。特に相模川と3支流が合流する地点にある海老名市の河原口坊中遺跡は、弥生時代～現代に至るまで続く複合遺跡で、その旧河道の中から大量の木製品が状態良く出土しており、各時代の人々が想像以上に様々な道具を使いこなしていることを教えてくれる。残念ながら、この展示はコロナ禍のために一般観覧されず(会期2月6日～3月7日)に撤収されてしまうという。我々だけ貴重な展示を満喫できたが、「資料」が語りかける圧倒的な迫力を是非生徒にも味わって欲しかった。続いて展示入れ替え中の常設展を見学後、新谷桂氏(希望ヶ丘高校)によるレポート「『樺太』を教える」を、北方史の専門で昨年度「北からの開国」展を企画された嶋村元宏氏はじめ、多くの学芸員の方にも聞いて頂き、教材化について歴史学の立場からも有益な意見をうかがうことが出来た。(新谷氏報告の詳細は、本誌の同氏報告を参照)。



写真①

最後に博学双方の意見交換会がおこなわれた【写真②】。まず、来年導入の『歴史総合』・『日本史探求』についての概要、その中の博物館や地域資料の位置づけを筆者から県博側へ報告し、今後の歴史教育が資料を用いた生徒の問題解決学習が中心となることを踏まえ、授業で用いる教材開発の支援を求めた。県博側も「高校生のための展示資料50」(企画普及課 中澤洋氏作成)という県博の所蔵資料で歴史学習に役立つリーフレットを用意いただき、高校生の利用に資したい旨が述べられた。



写真②

そもそも現行の学習指導要領でも学校教育における博物館の積極的な活用は指摘されており、本会も過去に何度か県博との意見交換を行ってきた。しかし博学連携の大枠では一致しながら、具体的な動きに繋がらず、結局立ち消えになることを繰り返してきたのである。今回はこうした問題点から議論が発端したため、具体的・建設的な意見交換ができたのではないかと思う。県博・本委員会の双方の連携窓口が確認され、県博を会場にした定期的な例会の実施、博学双方からレポートの実施など、早速取り組めそうな事業が提案された。だが、博学連携の最大の目的は、本会の教員だけが県博の支援を得ることではない。多忙で県博を訪問できない教員や生徒にこそ、県博の施設や所蔵資料を活用できる環境を整えることであろう。「教員向けの展覧会解説(開館時間を考慮)」や「県博所蔵資料を使った授業実践例の公開」など、ユニークな提案も出された。だが、全てはこれからの話である。まずは博学双方にコスト・人的に負担のかからない「継続」こそが大事であろう。今回はその小さな「種火」が灯ったにすぎない。県博には各分野の地域資料に精通した専門家が揃い、生徒の興味を喚起する地域資料が教材化されずに眠っている。これを教員が「利用」しない手はあるまい。微力ながら、この「種火」が県内の高校に広がっていくように自らも努力したい。